

形容詞の述定のあり方に関して

－「明るい」をめぐって－

楊 婧 璋

キーワード: 属性形容詞、述定、主観的な側面、特性、状態

要旨

属性形容詞は、一般的に人間の主観から離れて、独立的な、客観的なものと考えられているが、ある程度主観的な側面をもつことが指摘できる。本論では、属性形容詞の述定をめぐって、形容詞の表す性質・属性の意味的なタイプ－特性と状態－について記述しながら、形容詞の主観的な側面を分析した。その結果として、基準の主観性と主観的な要素の濃い属性、といった語彙レベルの主観的な側面、と文脈に生じる主観的な要素が話し手の主体的な判断を左右する、といった文レベルの主観的な側面と区別できることを述べた。

1. はじめに

形容詞には、客観的な性質・属性の表現をなすもの(いわゆる属性形容詞)、と主観的な感覚・感情の表現をなすもの(いわゆる感情形容詞)との区別があること、が認められている(西尾1972, p. 21)。そのうち、属性形容詞の表す性質・属性というものは、人間の主観から離れて、独立的な、客観的なものと考えられている。しかしながら、下記の例のように、属性形容詞でも、ある程度主観的な側面をもつことが指摘できる。

- (1) 誕生の写真は産院の新生児室から始まります。赤ちゃんは看護婦さんに抱かれてガラス窓を通しての対面が最初となります。ガラスが間にあるとピントが狂いますから、できるだけガラス窓に近づいて写しましょう。産院内は比較的明るいのでISO四百の高感度フィルムを入れ、ストロボを使わずに写します。(森村進『女性のためのオートカメラ自由自在』1989)

ここで、「産院内は比較的明るい」の「明るい」は、「光が十分に感じられる状態だ(『大辞林』(第三版)を参照)」という意味を表し、「産院」の所属する「すべての室内」「(この)病院の中」などの集合の中で明るさの比較を通して、「明るい」という判断を与えられて、より客観的な性質・属性として捉えられる。一方、「産院内は比較的明る

い」は、話し手の個人的な経験にも判断されることを考えると、ある程度主観的な側面をもつことになると考えられる。

- (2)このコーナーでは、落ち込んだ友達を励ます時に使えそうな元気の出そうな話を集めてみた。「未来は確実に明るい。」夜中に目が覚めたりして、将来の事が急に不安になったというような経験はないだろうか？(萩原津年武『酒の席でつい披露したくなる日本語』2002)

ここで、「未来は確実に明るい」の「未来」は抽象名詞であって、具体名詞のように、ものの性質や人の性格など、性質・属性を簡単に捉えられるものではない。ここで、「明るい」は、「未来のことに対して、希望をもつことができる状態である(『大辞林』(第三版)を参照)」という意味を表して、むしろ人の価値観や個人的な経験などによって、「未来」の性質・属性を価値づけたものである。即ち、「未来」が「明るいか、明るくないか」、あるいは「明るいか、輝かしいか、暗いか、どうなるか」ということは、人の価値観や個人的な経験などによるものであって、話し手の主観が強く感じられるものである。さらに、ここの「明るい」の意味には、「楽しい」という要素が含まれている(西尾1972, p. 454)。とすれば、(1)の「産院内は比較的明るい」の「明るい」よりもっと主観的な要素の濃い性質・属性を表すものと考えられる。

- (3)あたりには、松やもみの木の甘い香りが漂っていた。ほくの気分は暗れやかだった。夕暮れ時のうす闇に包まれていても、エル・パライソの町は、荒涼たるニカラグアで見たどの町よりも明るく、ホンジュラスはなんとはなしに希望がもてそうな国であるように思われた。ここでは残骸や瓦礫が町中に散らばっているということはなかった。(ジョージ・ミーガン(著)/藤井元子(訳)『世界最長の徒歩旅行』1990)

ここで、「エル・パライソの町は、荒涼たるニカラグアで見たどの町よりも明るく」は、「夕暮れ時のエル・パライソの町の明るさ」が、「荒涼たるニカラグアで見たどの町の明るさ」より明るいという両者の比較として捉えられるが、ここの「明るい」は話し手のその時の気分を反映している、ある程度主観的な側面をもつものである。即ち、話し手のその時の気分によって、エル・パライソの町が、荒涼たるニカラグアで見たどの町よりも、明るいか、明るくないか、ということに対する判断が左右されている。文脈の「ホンジュラスはなんとはなしに希望がもてそうな国であるように思われた」に話し手のその時の気分が反映されている。

これらの例文のように、属性形容詞が一般的に人間の主観から離れて、独立的な、

客観的な性質・属性を表すと考えられるものの、ある程度主観的な側面をもつことが把握できる。そして、このような主観的な側面に関しては、樋口(2010:43)で「評価」として捉えて、下記のように、記述されている。

形容詞が人や物の特性をさししめるとき、さししめされる特性はそれらに客観的にそなわっている特徴としてさしだされる一方で、何らかの基準との比較のなかでとらえられてもいる。この基準と比較することによって、物が他の物との関係のなかでもつ意義があきらかにされたり、それが人間の欲求、利害、目的とかかわってもつ意義があきらかにされたりするのだが、このような、物の意義をあきらかにする、人間の意識的な活動のことを《評価》とよぶことにする。そして、この人間の意識的な活動としての評価はすべての形容詞のなかにうつしだされていて、色や形などの客観的な特性をさししめず形容詞であっても、その意味のなかには、その特性を物にみいだす人間の主体的な側面がくいこんでいる。(樋口2010, p. 43)

つまり、形容詞が人や物の特性をさししめるとき、さししめされる特性はその人や物に客観的にそなわっている特徴としてさしだされると同時に、その人や物に対する話し手の認識や物事の把握方式など人間の意識的な活動という主観的な側面もくいこんでいるという。従って、形容詞のもつ主観的な側面は、形容詞の意味における物事に対する話し手の主体的な関わりのことである。また、西尾(1972:176)によると、「主観を離れた、まったく客観的な性質などは、少なくとも単語の表す意味の世界にはあり得ないであろう。主観的といい、客観的といっても、相対的・程度的な違いにすぎないと言わなければなるまい」という。本論では、属性形容詞の述定のあり方をめぐって、形容詞の表す性質・属性を記述しながら、形容詞のもつ主観的な側面について考える。

2. 属性形容詞の主観的な側面に関して

西尾(1972)では、属性形容詞の主観的な性格に関して、基準の主観性と、主観的な要素の濃い属性を表すものなどが指摘されている。以下には基準の主観性に関する西尾(1972)の記述を引用する。

例えば、「ながい」「ふとい」「ちいさい」などの空間的な量をあらわす形容詞は、外界の物体の物理的な量に関しての点で、客観的な性質が濃いいえよう。もっとも、これらの形容詞に関しても、ある物体が「ながい」か「みじかい」か、「ふ

とい]か「ほそい]かなどを分つ基準は、話し手の個人的な経験などに左右される点で主観的な側面もある。(西尾1972, p. 176)

このような話し手の個人的な経験などは、主観的な基準といえよう。そして、これらの空間的な量を表す形容詞の例は、かなり客観的な性質を表すとしても、場合によって、主観的な側面が見られる。

また、主観的な要素の濃い属性を表すものに関しては、形容詞の意味の中に物事の与える感じや印象を反映するものなどである。以下には西尾(1972:177)で挙げた「厳めしい」の例を引用する。

○頬ひげのいかめしい土方がそれをシャベルでならしている。(暗夜行路・前 139)

○彼は只厳めしく見える警察官が恐ろしくどうしても足が進まないのである。

(土・上 151)

○建物幾棟かあって、長い塀は其周囲を厳めしく取繞んだ。(破戒 125)

○(省略)と認めた桧の高札がいかめしく樹てられていた頃の事である。(青銅の基督 9)

ここで、「いかめしい」は、ひげ、こわい感じのする人のようす、家の外がまえ、高札などに使われた例である。「近よりにくい感じを与えるほど立派で威厳がある(『大辞林』(第三版)を参照)」という意味を表して、「人に威圧感を与えるような、ただけしい感じ(西尾1972, 177)」という意味を反映しているといえよう。つまり、属性形容詞「いかめしい」の表す性質・属性は、主観から離れて、独立的な、客観性のつよい性質・属性ではなく、人に威圧感を与えるような、ただけしい感じという主観に色づけされた性質・属性であると考えられる。「いかめしい」のような属性形容詞は、主観的な要素の濃い属性を表すものといえよう。

3. 形容詞の述定の意味的なタイプに関して

形容詞が述語の位置にあらわれる時に表現される意味的なタイプに関しては、荒(1989:147)では、〈特性〉と〈状態〉と大きく分けている。そして、この二つの意味的なタイプによって、形容詞を〈質形容詞〉と〈状態形容詞〉と分類している。その考え方をうけついで、樋口(1996)では、〈質形容詞〉と〈状態形容詞〉をめぐる、それぞれの語彙・文法的な特徴を具体的に記述している。なお、〈特性〉と〈状態〉の定義に関しては、奥田(1996)の指摘(樋口(1996)の解説を行っている「発行にあたって」の一部)を引用しておく。

樋口によれば、《状態》は人や物の内面や外面にあらわれてくる現象である。この現象は人や物の相互作用のなかで時間のながれのなかであらわれたり、きえたりする。したがって、状態形容詞がさしだす状態は、つねに《いつ、どこで》という時間・空間的なありか限定をうけてとっている。それが具体的な現象形態であるとすれば、この状態を人間はつねに経験、知覚と体験によってとらえているということになるだろう。(後略)

他方では、《特性》は物に恒常的にそなわっている、物そのものの、もちまへの性質である。この性質は他との相互作用のなかで自己暴露するのであって、ふつうはそうすることもなく、ポテンシャルなものとして人や物の内部にかくれている。たとえば、「あの人は意地がわるい」といったところで、その表現にはいかなる具体性もなく、抽象的に人の性格を特徴づけているにすぎない。しかし、この表現は「あの人」の過去における、たくさんのふるまいを経験的に一般化しているし、ときとばあいによっては、これからも、おなじようなふるまいをおこなうだろうという見とおしをふくみこんでいる。特性が、人や物にそなわっている、ポテンシャルなもちまへの性質であるということは、こういうことなのである。

(奥田1996, pp. 6-7)

というように、ある一つの特徴は、時間的なありか限定をうけているかどうかによって、状態になるし、特性になるということである。そして、状態は、人や物の内面や外面にあらわれる現象として捉えられ、特性は、人や物にそなわっている、ポテンシャルなもちまへの性質として捉えられるものである。また、樋口(1996:55)では、形容詞のもつさまざまな意味に関して、特性と状態という意味的なタイプから分析されている。以下のように、引用しておく。

多義的な形容詞は、ひとつの意味において状態形容詞であるとしても、べつの意味では質形容詞であるということがおこってくる。(中略)たとえば、「つまらない」とか「おもしろい」とかいう形容詞は、心理的な状態をさしだすこともできるし、対象のもっている特性をさしだすこともできる。「かわいい」という形容詞も情緒的な状態をさしだすこともできるし、対象のもっている特性をさしだすこともできる。これらは、ひとつの形容詞のなかで、ことなる意味をなして、その形容詞を多義的にしている。こうして、その形容詞の意味が状態的であるか、特性的であるかということの判断は、形容詞の意味の規定にとって重大な意味をもってくる。

(樋口1996, p. 55)

というように、一つの形容詞のもつさまざまな意味には、一つの意味において特性的であるとしても、べつの意味では状態的である、ということもおこってくる。

4. 述定の基本的な性質に関して

本論では、以上の先行研究に基づき、属性形容詞「明るい」を取り上げて、形容詞が述定になる場合をめぐって考察していく。用例は、すべて「書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」から収集する。その結果、「書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」から取り出した「明るい」の述定の用例は、1052例である。この節では、「明るい」の述定をめぐって、形容詞の表す性質・属性の意味的なタイプについて記述しながら、形容詞の主観的な側面を分析していくが、まず、述定の基本的な性質について、再度確認しておこう。

形容詞の述定の意味的なタイプは、形容詞の表す性質・属性が時間的なありか限定をうけるかどうか、ということから大きく〈特性〉と〈状態〉に分けられる。そして、一つの形容詞のもつさまざまな意味に対して、一つの意味においては特性的であるとしても、べつの意味では状態的である、ということもおこってくるという。また、形容詞のもつ主観的な側面に関し、本論でいう主観的な側面とは、形容詞の意味における物事に対する話し手の主体的な関わりのことである。

4-1. 〈特性〉を表す述定の場合

第3節ですでに述べたように、特性とは、時間的なありか限定をうけずに、人や物にそなわっている、ポテンシャルな、もちまへの性質である。用例の分析を通して、「明るい」の意味¹は、「色が澄んでいる。黒や灰色などがまじらず鮮やかである。彩度が高い」「人の性質が明朗で陽気だ」「未来のことに対して、希望をもつことができる。楽しい状態が予想される」「表現内容や、芸術作品などが、深刻ではなくて、受け手を楽しく朗らかな気分にしそうな性質だ」である場合に、常に特性を表す、ということが分かった。具体的には、下記の例で示す。

(4) 飯田さんの家には家庭訪問したことがあるんですが、お母さんがとっても気さくで、明るい方です。 (『モーニング娘。21人の足跡』2003)

ここで、「お母さん」と「明るい」は、属性のもちぬしと属性という結びつきで意味的な関係を表す。話し手は、「お母さん」の具体的な話し方などに対して、対人関係の中で「明るい」という判断を与えているのである。即ち、話し手が、「お母さん」の具体的

な話し方などに対して、何らかの基準で、その話し方の一般的なパターンを「明るい」と判断している。その話し方の一般的なパターンは、人の内部にすでに成立している、時と場合によって現れてくるものであるため、その人にそなわっている、ポテンシャルな特性だと考えられる。とすれば、「明るい」は、その人にそなわっている、ポテンシャルな特性だということになる。

(5) 青春とは、明るい、華やかな、生気に満ちたものであろうか。それとも、もっとうらぶれて、陰鬱な、抑圧されたものであろうか。 (『書き出し美術館』1989)

ここで、「青春」と「明るい」は、属性のもちぬしと属性という結びつきで意味的な関係を表す。「青春」は、抽象名詞なので、物の性質や人の性格などのように、性質・属性を簡単に捉えられるものではない。むしろ、ここの「明るい」は、人の価値観や個人的な経験によって、「青春」に価値づけられたものである。そして、「青春」は、ある特定の時間に現れたり、消えたりすることができないものと考えられる。従って、ここの「明るい」は、人に価値づけられたものとして特性を表している。ただし、「青春」は過去の出来事として捉えられるが、発話時にすでに存在していないので、「青春が明るかった」の「明るかった」も特性を表すものになる。

(6) 新制作の彫刻はうちながめたところ人物がインテリ青年的表情が多く、上品で明るくて従来の日展あたりとちがった世代を感じさせるのは事実である。がもちろんそんな表情がいくらならんでも彫刻の本質とは関係がない。

(滝口修造『コレクション』1992)

ここで、「新制作の彫刻」と「明るい」は、属性のもちぬしと属性という結びつきで意味的な関係を表す。「明るい」は、話し手が「新制作の彫刻」の外形や素材などに対して、何らかの基準で判断されたものである。即ち、話し手が「新制作の彫刻」の外形や素材などに対して、何らかの基準で、その外形や素材などの一般的なパターンに「明るい」という判断を与えている。「新制作の彫刻」の外形や素材などの一般的なパターンは、その彫刻にそなわっている、ポテンシャルな特性であると考えられる。とすれば、「明るい」は「新制作の彫刻」にそなわっている、ポテンシャルな特性だということになる。

また、下記の例のように、「明るい」は、「光が十分にある(と感じられる)状態だ」という意味を表し、常に物事の状態を表すものの、特性を表すものも見られる。

(7) 前方にトンネル。歩道は右側にしかない。自転車を歩道に乗り上げて走る。トンネル内では、自転車も歩道を走らなくては危険である、と聞いていた。間違いで

はない。だが、歩道も安全ではないことがよくわかった。このトンネルの内部は明るい。崖に沿ってコの字型に掘られている。つまり、古い建築物の回廊のように、左側は柵のようなコンクリートの柱で支えられている。

(風間一輝『男たちは北へ』1989)

ここで、「明るい」は、時間的なありか限定をうけずに、「このトンネルの内部」の「明るさ」について、特性を表している。また、「明るい」の過去形の場合には、特性を表すものも見られる。以下に、例を示す。

- (8) 皇太子の御成婚。安保闘争。東京オリンピック。これが、昭和三十年代の三大ビッグイベントであり、悲惨も、たっぷりかかえ込んではいたが、“時代の気分”としては、ただ前進あるのみで、ひるむことのない熱狂とバイタリティにあふれていた。元気で、素朴で、なぜか減法、明るかった。(永倉萬治『昭和30年代通信』1990)
- (9) 柿村氏も、「世の無常を詠じたものとして最も博く伝誦せられ、古今雅俗あらゆる歌文に影響せり」と指摘している。しかし作者遍昭は、仁明天皇の急死に殉じて出家したとはいえ、その後も教界において栄達の道を歩いて僧正に昇った人で、周知のごとく詠風も古今歌人の中で最も明るく、機智的であった。

(目崎徳衛『数奇と無常』1988)

(8)と(9)で示されたように、過去を表す特性の表現は、発話時にすでに存在していない物事の特徴を表す。八亀(2008:84)では、過去を表す特性のもちぬしに関しては、「(属性のもちぬし)になるのは、「死者」「すでにない地名」「文脈上すでにないことが明らかなもの」「過去の出来事」等である。例外的に「別れた異性」は、生きていても「過去の人」らしく、「ここに入る」と指摘されている。

4-2. 〈状態〉を表す述定の場合

第3節ですでに述べたように、状態とは、時間的なありか限定をうけている、人や物の内面や外面にあらわれる現象である。「明るい」の意味は、「光が十分にある(と感じられる)状態だ」「気持ち・心がはればれとして、朗らかだ」「人間の表情や動作のようすなどが、楽しそうで晴れやかだ」「会合・組織などで、人々が集まってもし出す雰囲気、かたくるしくなくて、楽しくなごやかな状態や性質だ」である場合に、常に状態を表す、ということが分かった。以下に例を示す。

- (10)「天井が見えるってことは…」乱は、ほとんど声にならない声で、つぶやいた。
「部屋が明るいってことか…」たしかに明るかった。フット・ライトと、ベッドか

らは死角になったドアの近くの小さなライトが灯っているだけなのだが、起きたばかりの眼には、それだけでも十分に明るい。

(横溝美晶『一角獣秘宝伝』1993)

ここで、「明るい」は、「フット・ライトと、ベッドからは死角になったドアの近くの小さなライト」の特性を表すのではなく、「起きたばかりの眼には」という特定の場合に現れてくる状態を表すものである。

(11) 貢はまわりを見まわした。「何?このぼろ家」「外に出てみろよ」神島に言われて、貢は外に出たが、しばらくしてもどってきた。「もしかして、ここ牛首村?」「そうだよ」「眠ってるうちに着いたのか」貢の表情は底抜けに明るい。

(宗田理『奥の細道失踪事件』1993)

ここで、「明るい」は、「貢の表情」の特性を表すのではなく、「底抜けに」と共起して、一時的な状態を表す。そして、「表情」の「明るい」というのは、人が直覚的に一時的にして捉えられる、変わりうるものであって、一時的な状態である。

(12) 「なぜ今日はそんなに明るいのか?なんだか気分がふっきれたっていうのかなあ。」 (森川直樹『あなたがホームレスになる日』1994)

ここで、「明るい」は、「今日」のような時間の状況成分と共起して、一時的な状態であることが明示されている。また、「明るい」の過去形の場合には、状態を表すものも見られる。具体的には、以下の例で示す。

(13) その夜は、ますます風が強くなり、小雨がぱらついた。ドリームにはボディカバーがかぶせられた。ホンダ・チームのテントが突風で飛ばされてしまった。ひとつ飛んだときは、みんな笑っていたが、次々と飛ばされるようになると、笑っている場合ではなかった。懐中電灯を片手に、荒野のなかでテントを探して歩かなければならなかった。チームの雰囲気は明るかった。運さえよければ、明日にもアデレードのフィニッシュ・ラインを通過できる可能性があったからである。

(中部博『光の国のグランプリ』1994)

ここで、「チームの雰囲気」と「明るかった」は、属性のもちぬしと属性という結びつきで意味的な関係を表すが、「明るかった」は、「チームの雰囲気」の特性を表すのではなく、一時的な状態を表す。文脈にある「その夜」という時間の状況成分によって、一時的な状態であることが明示されている。

4-3. 「明るい」の述定における主観的な側面

第1節での西尾(1972)の記述のように、主観を離れた、まったく客観的な性質などは、少なくとも単語の表す意味の世界にはあり得ない。この節では、「明るい」の述定における主観的な側面について分析していく。まず、(14)のようなより客観的な表現を見よう。

(14) 蛍光ランプは電球に比べて約4倍も明るく、しかも、5倍以上も長持ちしますので、省エネルギー向きといえます。

(小泉実『絵ときインテリアライティングの技法早わかり』1987)

ここで、「蛍光ランプは電球に比べて約4倍も明るく」は、基準が明示されている場合である。「明るい」は、「蛍光ランプの明るさ」が、「電球の明るさ」を基準として比較された結果を表す。このような、具体的な基準が明示されている場合には、かなり客観的な表現になる。

(15)「夜が明けてから行きましょう」と答えると、「いや足元はこんなに明るいのだから今から行って来い」といわれる。(武田友助『日本の原爆記録』1991)

ここで、「いや足元はこんなに明るい」は、基準が明示されていない場合であって(ここはおそらく個人的な経験を基準としている)、目の前に現れる現象を描写するものである。一方、話し手の個人的な経験を基準として、判断されることを考えると、ある程度主観的な側面をもつことになる。

(16)これは、性格も明るく、クラスのなかでも人気のあった、そして部活動でもキャプテンをしていた一人の女子生徒の話です。(石井都男『中学生の勉強法』2001)

ここで、「性格も明るく」は、基準が明示されていない場合であって、話し手が、「女子生徒」の普段の話し方や対人関係などに対して、性格の一般的なパターンを「明るい」と判断している。一方、話し手の個人的な経験を基準として判断されていることを考えると、ある程度主観的な側面をもつことにもなる。

(17)「いつもの調子で、説教したったらええやんけ。お前らしいないなあ」タツタに言われて、アンディは、友の顔を見た。「誰かの間違いを直したるんは、お前がいちばん得意にしてるこっちゃんけ」ミュルーンの口調は、からかっているかのように明るい。(友野詳『ルナル・サーガ』1994)

ここで、「ミュルーンの口調は、からかっているかのように明るい」は、基準が明示されていない場合であるが、むしろ「口調」の「明るい」というのに対して、「明るいか、明るくないか、どれだけ明るいかな」などの判断基準が定まらないものである。ここは、

おそらく個人的な経験を基準としている。そして、「明るい」は、「人間の表情や動作のようすなどが、楽しそうで晴れやかだ」という意味を表して、「楽しい」という要素が意味に含まれていると考えられる。

(15)~(17)のような、個人的な経験を基準とする場合と形容詞の意味の中に含まれている主観的な要素の場合は、第2節で述べた、西尾(1972:176-177)で指摘された基準の主観性と主観的な要素の濃い属性を表すものである。また、次の例を見てみよう。

(18)「くらがりの世」とよんだ島津氏の禁宗時代から「お開きの世」となり、それらの人々も許されてふるさとへ帰ることになった。南国の五月の陽ざしは明るかった。青葉若葉のもとをふるさとへ急ぐ人々の足はかるく、迎える親類、縁者の顔も明るかった。 (丸山勝弘『旅談義・酒談義』2002)

ここで、「南国の五月の陽ざしは明るかった」は、自然現象を表すものと捉えられるが、ここの「明るい」は、むしろ話し手のその時の気持ちを反映しているものである。即ち、話し手のその時の気持ちは、南国の五月の陽ざしが明るいか、明るくないかに対する判断を左右している。具体的な基準や個人的な経験を基準とするのではなく、話し手のその時の気持ちが直接に判断を左右するものである。文脈の「青葉若葉のもとをふるさとへ急ぐ人々の足はかるく、迎える親類、縁者の顔も明るかった」には話し手のその時の気持ちが反映されている。そして、上記の(15)~(17)の表す主観的な性格と比べて考えると、(15)~(17)のような、基準の主観性と主観的な要素の濃い属性を表すものという場合は、形容詞における語彙レベルの主観的な側面であって、(18)のような、文脈が判断を左右する主観的な要素の場合は、形容詞における文レベルの主観的な側面といえよう。さらに、形容詞のもつ主観的な側面と形容詞の述定における意味的なタイプとの関わりに関しては、状態を表すものに対しては、話し手の主体的な判断が一時的で、変わりやすいものであるが(例(15)(17)(18)のようなもの)、特性を表すものに対しては、話し手の主体的な判断が持続的で、変わりにくいものという特徴が見られる(例(16)のようなもの)。

5. まとめ

本論では、属性形容詞「明るい」を取り上げ、形容詞の述定のあり方をめぐって、形容詞の表す性質・属性の意味的なタイプについて記述することを通して、形容詞の主観的な側面を分析した。その結果については、以下にまとめられる。

- ①「明るい」のもつ意味は、「色が澄んでいる。黒や灰色などがまじらず鮮やかである。彩度が高い」「人の性質が明朗で陽気だ」「未来のことに対して、希望をもつことができる。楽しい状態が予想される」「表現内容や、芸術作品などが、深刻ではなくて、受け手を楽しく朗らかな気分にさそうような性質だ」である場合には、常に特性を表すものであるが、「光が十分にある(と感じられる)状態だ」「気持ち・心がはればれとして、朗らかだ」「人間の表情や動作のようすなどが、楽しそうで晴れやかだ」「会合・組織などで、人々が集まってかもし出す雰囲気、かたくるしくなくて、楽しくなごやかな状態や性質だ」である場合には、常に状態を表すものである、ということが分かった。
- ②形容詞のもつ主観的な側面に関しては、西尾(1972)で指摘された基準の主観性と主観的な要素の濃い属性を表す場合以外に、文脈に生じる主観的な要素が話し手の主体的な判断を左右する場合もあることが分かった。そして、基準の主観性と主観的な要素の濃い属性を表す場合は、むしろ語彙レベルにおける主観的な側面であるが、文脈に生じる主観的な要素が話し手の主体的な判断を左右する場合は文レベルにおける主観的な側面であると言える。
- ③形容詞のもつ主観的な側面と形容詞の述定における意味的なタイプとの関わりに関しては、特性を表す述定の場合では、色や人間の性格や芸術作品などを主語として、形容詞の主観的な側面の現れ方は持続的であると見られるが、状態を表す述定の場合では、光や気持ちや表情や雰囲気などを主語として、形容詞の主観的な側面の現れ方は一時的で、変わりやすいという特徴が見られる。

注

1. 第4節での「明るい」の意味解釈は、すべて『大辞林』(第三版)を参照したものである。

用例出典

本論文で扱った用例は、すべて「書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」から収集したものである。

参考文献

- 荒 正子(1989)「形容詞の意味的なタイプ」『ことばの科学3』pp. 147 - 162 むぎ書房
 奥田靖雄(1996)「『ことばの科学』第7集の発行にあたって」『ことばの科学7』pp. 6 - 7 むぎ書房
 樋口文彦(1996)「形容詞の分類 - 状態形容詞と質形容詞 - 」『ことばの科学7』pp. 39 - 60 むぎ書房
 樋口文彦(2001)「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学10』pp. 43 - 66 むぎ書房
 西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
 八亀裕美(2008)『日本語形容詞の記述的研究 - 類型論的視点から - 』明治書院

参考辞書

【大辞林】第三版(2006)

- 東北大学大学院生 -